

日本人の対外イメージ

真 鍋 一 史

はじめに

この小論では日本人の対外イメージをとらえるためのパイロット・スタディのいくつかをみつめている。日本人の対外イメージという課題の重要性については多くを語る必要はないであろう。国際コミュニケーションを促進あるいは阻害する重要な要因のひとつが対外イメージであることを考えるならば、日本も国際化の波にさらされるようになってきた現代においては、日本人の対外イメージの研究の重要性はいくら強調してもしすぎることはない。

そこで日本人の対外イメージについての実証的研究を計画しようとするならば、対外イメージという用語の「外」と「イメージ」という2つの言葉が問題となる。まず「外」についていえば、対外イメージというのは「外」に対するイメージであるが、その「外」とは何かということである。ここではそれを外の世界に関するすべてのことから、およびそれらと日本—外国という場合と同様、日本という場合も「国」という枠組にしばらくは留められることなく、日本文化、日本人などすべてを含む—とのかかわり合いに関するすべてのことから含むというように、きわめて広く考えておきたい（穂山貞登他『日本人の対外国態度』、至誠堂、1977）。

つぎに「イメージ」については、それは人びとの内部的な心的傾向であり、行動の準備状態のひとつである。このような行動の準備状態としては「イメージ」のほかにも「態度」や「意識」という用語が用いられている。一般に「態度」は認知的成分と感情的成分からなるかなり安定した長期的な心的傾向であり、「意識」は認知的成分の強い論理一貫性の高い内的状態であると考えられている。これに対して「イメージ」の方は安定性が低く、短期的で、一貫性が少なく、感情的な成

分の強い漠然とした心的特性の複合体であるといえよう（鮑戸弘『イメージの心理学』、潮新書、1970）。

最後に日本人の対外イメージをとらえる方法についても述べておきたい。社会調査における観察の技術には、これまで、「社会現象がそのうえに痕を残しているところの諸資料を分析する方法」と「社会現象を直接観察する方法」の2つの種類があるとされている（M・デュヴェルジュ、深瀬忠一他訳、『社会科学の諸方法』、勁草書房、1968）。対外イメージの研究についていえば、前者の型には日本人の対外イメージの反映体としての諸資料の「内容分析」が、後者の型には質問紙による日本人の対外イメージの「意識調査」があげられる。ここでは以上の2つの種類の方法を用いたパイロット・スタディを紹介しておきたい。ひとつは内容分析の方法による接近の例であり、ここでは資料としては小学校・中学校の社会科の教科書と小学生が外国について自由に書いた作文が利用されている。もうひとつは意識調査の方法による接近の例であり、そのばあい調査対象には慶応義塾大学と関西学院大学の学生が選ばれている。これらは日本人の対外イメージをとらえるためのパイロット・スタディとしておこなったものであるが、今後の本格的な調査研究になんらかの示唆をあたえることができると思うのである。

I 内容分析

1. 小・中学校の社会科教科書の内容分析

A) 小学校の社会科教科書の内容分析

この分析は小学校の社会科の教科書において、どのような国のどのような側面がとりあげられているかをとらえるためのパイロット・スタディとしておこなったものである。

そのために分析の対象としては便宜的に吹田市立桃山台小学校で使用している大阪書籍の『小学

社会』10冊を用いることとした（昭和51年現在）。なお発行年月日は『しょうがくしゃかい1年』（無記載）、『小学社会2年』（昭和51年2月5日）、『小学社会3年上』（昭和49年1月30日）、『小学社会3年下』（昭和50年5月20日）、『小学社会4年上』（昭和49年1月30日）、『小学社会4年下』（昭和50年5月20日）、『小学社会5年上』（昭和51年2月5日）、『小学社会5年下』（無記載）、『小学社会6年上』（昭和50年2月5日）、『小学社会6年下』（昭和50年5月20日）である。

つぎに分析の対象としたページは日本の歴史に関する部分を除くページで、本文だけとし、図表、脚注、写真とその説明などは対象外とした。歴史に関する部分を除いたのは、現存しない歴史的な国名（元など）がでてきて、分析が繁雑となることを避けるためである。

分析項目は、(1)小学校の社会科教科書における外国名および都市名の頻度分析、(2)小学校の社会科教科書における外国および都市についての記述

内容の分析、の2つである。

(1)小学校の社会科教科書における外国名および都市名の頻度分析

i) 分析方法

① 国名、都市名が載っている回数とページ数をそれぞれ数える。

② 国名、都市名が2ページにわたっているばあいのページ数は1と数える。

③ 大陸、海洋は数えない。たとえば「アメリカ大陸」はアメリカ合衆国にはとれないし、「インド洋」をインドに入れることはできない。

④ 「～人」「～政府」「～軍」「～戦争」は～についての記述ととれるので数える。

ii) 分析の結果

国名の記載回数とその国の都市名の記載回数との合計で順位をつけたのがつぎの表（表I-1）である。この結果からとくに顕著な点だけをつぎに列記しておこう。

① 記載回数が最も多いのはアメリカ合衆国

表I-1 国名、都市名のページ数および記載回数

順位	国、都市	ページ数	記載回数	順位	国、都市	ページ数	記載回数	
1	アメリカ(合衆国)	27	28	12	ドイツ	2	3	
	アラスカ	4			ナイジェリア			2
	ワシントン	1			朝鮮			2
	ニューヨーク	1			フィリピン			2
2	インドネシア	12	23	13	イタリヤ	2	2	
	ジャカルタ	1			南アフリカ共和国			2
3	オーストラリア	12	17	13	スウェーデン	1	2	
	シドニー	1			ストックホルム			1
3	ソノリスク	17	19	13	大韓民国	2	2	
	モスクワ				1			ドイツ民主共和国
4	イギリス	12	17	14	朝鮮民主主義人民共和国	1	1	
5	インド	10	13	14	モンゴル	1	1	
5	中華人民共和国	8	13	14	タイ	1	1	
6	イラン	6	10	14	マレーシア	1	1	
7	中国	7	9	14	シンガポール	1	1	
7	フランス	7	7	14	クウェート	1	1	
	パリ				2			ポルトガル
8	オランダ	4	8	14	スペイン	1	1	
9	カナダ	5	6	14	ブラジル	1	1	
10	ドイツ連邦共和国	4	5	14	ニュージーランド	1	1	
10	サウジアラビア	4	5	14	アルゼンチン	1	1	
10	スイス	2	3	14	バン格拉デシュ	1	1	
	ジュネーブ				2			エジプト
11	イラク	2	4	14	リベリア	1	1	
11	ベトナム	4	4					
11	ビアフラ	3	4					
12	中華民国(台湾)	3	3					
							計	249

(都市およびアラスカという地域を含めて)の34回で、2位のインドネシアの24回を圧倒的にひき離している。

② 2位にインドネシア(24回)が位置している意外であるが、これは6年下の教科書に「世界の土地と人——さまざまな自然と生活」という内容のところが、そこでとくにインドネシア、オーストラリア、イランについて詳しい記述がなされていることによる。

③ ここでは中国を中華人民共和国や中華民国(台湾)とひとまず別にして集計しているが、それが文章の内容からすると、中華人民共和国であるばあいと中華人民共和国と中華民国(台湾)の両方を含めているばあいがあった。そこで中国と中華人民共和国を加えて集計するならば、中国についての記載回数は22回で3位となり、ソ連の21回と並ぶことになる。

④ オーストラリアが上位に位置しているのはすでに述べた理由による。

⑤ インドは意外に多く、13回という記載回数である。

⑥ ドイツ民主共和国が1回であるのに対して、ドイツ連邦共和国は5回となっている。

⑦ サウジアラビアがドイツ連邦共和国と同じく5回で割に多い。

⑧ 以上のような回数をページ数と対応させてみるならば、その記載が集中的であるか、それとも分散的であるかがわかる。たとえばアメリカ合衆国は33ページにわたって34回記載されており、またソ連も19ページに21回の記載であるから分散的といえる。これに対してインドネシアは13ページに24回、オーストラリアは13ページに21回、中

国(中華人民共和国)は15ページに22回で、いずれも集中的といえる。

⑨ 都市名の記載回数を見ると、アメリカ合衆国にはアラスカという地域名を含めているので6回となるが、都市名だけにかぎるとワシントン1回とニューヨーク1回の2回、ソ連もモスクワ1回とノリリスク1回の2回、フランスもパリが2回、スイスもジュネーブが2回と4か国とも同じ数値になる。とくにスイスについてはジュネーブ2回、スイス2回と国名と都市名の記載回数が同数である点が注目される。

(2) 小学校の社会科教科書における外国および都市についての記述内容の分析

i) 分析の方法

① 外国名(「～人」も含む)および都市名(アラスカという地域名を含む)が記載されている1つの段落を1つの分析単位とする。

② 記述内容を整理する枠組はつきに示すとおりである(表I-2)。横軸は、a)日本との関係について記述されているばあい、b)国際的な関係あるいは特定の国との関係について記述されているばあい、c)国内のことがらについて記述されているばあい、の4つである。縦軸は、1)経済、2)政治、3)社会、4)文化、5)自然、6)国民、の6つである。

たとえば「資源がある」という記述は5)自然へ、「資源の輸出、輸入」という内容のばあいは1)経済へ入れることにした。また、戦争や植民地時代の記述については6)国際的な関係あるいは特定の国とのかわりあいについての記述として整理した。

③ 頻度分析のばあいと同じく大陸、海洋はあ

表I-2 外国および都市に関する記述内容の分析枠組

	a. 日本との関係	b. 国際間, 他国関係	c. 国内のことがら	計
1. 経 済				
2. 政 治				
3. 社 会				
4. 文 化				
5. 自 然				
6. 国 民				
計				

つかわない。

④ 「イランのほか、イラク、アラビアなど西南アジアの地方……」というばあいのイランなどのように意味内容が示されていないものはあつかわない。

ii) 分析の結果

いくつか特徴のある国についてのみ分析の結果を紹介していくことにする。

① アメリカ合衆国については、一方の軸では「政治」と「経済」の記述が多い。また他の軸でみると「国内のことがら」と「日本との関係」についての記述が多い。2つの軸を組み合わせるならば「経済面」では「国内のことがら」と「日本との関係」が同数であり、「政治面」では「国際的および特定の国との関係」が多く記述され、また「文化面」での記述は「国内のことがら」に関するものだけとなっている、などがわかる(表I-3)。

表I-3 アメリカ合衆国

	a	b	c	計
1	6		6	12
2	5	8	1	14
3	1			1
4			4	4
5	2	1	3	6
6			3	3
計	14	9	17	40

② ソ連では「政治」の割合が高く、全体の半分までをしめている。もう一方の軸では「日本との関係」の記述の割合が「国内のことがら」および「国際的および特定の国との関係」にくらべてもっとも小さくなっている。両軸の組み合わせでみると、「政治面」で「国際的および特定の国との関係」に関する記述が圧倒的に多いことがわか

表I-4 ソ連

	a	b	c	計
1	1			1
2	1	6	1	8
3				
4			2	2
5	1		3	4
6			1	1
計	3	6	7	16

る(表I-4)。

③ 中国では「経済」と「日本との関係」の記述が多い。それに対して中華人民共和国では「政治」と「国際的および特定の国との関係」「国内のことがら」についての記述が多い(表I-5a, b)。

④ ドイツに関しては「日本との関係」の記述が全体の過半数をしめている。ところがドイツ連

表I-5a 中国

	a	b	c	計
1	2		2	4
2		1		1
3				
4	2			2
5	1		1	2
6				
計	5	1	3	9

表I-5b 中華人民共和国

	a	b	c	計
1				
2	2	4	2	8
3				
4				
5			1	1
6			2	2
計	2	4	5	11

表I-6a ドイツ

	a	b	c	計
1	2			2
2	1	2		3
3				
4	1			1
5			1	1
6				
計	4	2	1	7

表I-6b ドイツ民主共和国

	a	b	c	計
1				
2		1		1
3				
4				
5				
6				
計		1		1

表I-6c ドイツ連邦共和国

	a	b	c	計
1			2	2
2		1		1
3				
4				
5				
6			1	1
計		1	3	4

表I-7 カナダ

	a	b	c	計
1	1		1	2
2				
3				
4				
5	2		3	5
6			1	1
計	3		5	8

表I-8 インド

	a	b	c	計
1	1		2	3
2		1		1
3				
4	1			1
5			1	1
6			6	6
計	2	1	9	12

表I-9 スイス

	a	b	c	計
1				
2				
3				
4		3		3
5				
6			1	1
計		3	1	4

ということである(表I-7)。

⑥ インドでは「国民」についての記述が全体の半数までをしめているのが特徴である。その具体的な内容は人口と飢えに関するものである(表I-8)。

⑦ スイスについては「文化面」での「国際的および特定の国と関係」に関する記述がほとんどをしめている。その具体的な内容はユネスコや赤十字に関することからである(表I-9)。

B) 中学校の社会科教科書の内容分析

この分析は中学校の社会科の教科書において、どのような国のどのような側面がとりあげられているかをとらえるためのパイロット・スタディとしておこなったものである。

そのために分析の対象としたのは、関西学院の中学部で現在1年生が使用している中教出版の『日本と世界の国々』(発行年月日の記載なし)と3年生が使用している日本書籍の『中学社会』(昭和49年4月10日)の2冊である(昭和51年現在)。この2冊を選んだ理由は、小学校の教科書のばあいと同様、あくまでも便宜的なものである。

分析の対象としたページは本文だけとし、学習のまとめ、問題、かこみ記事、見出し、図表、脚注、写真とその説明などは除外した。

分項項目は、(1)日本および日本以外の国々の記載量(単位はページ数)の分析、(2)外国名、都市名の出現頻度(単位は回数)の分析、である。

(1) 日本および日本以外の国々の記載量の分析

i) 分析の方法

① 2冊の教科書の目次を利用して、それぞれのおおまかな内容を把握する。

② 教科書の全ページを「日本」「日本以外の国々」「世界全般」「その他」に分類し、それぞれの比率を計算する。

③ 日本以外の国々は「アジア」「ヨーロッパ」「アングロアメリカ」「ラテンアメリカ」「ソ連」「オセアニア」「北極・南極」という諸地域のなかであつかわれているので、これらの諸地域のページ数を計算し、比率によって示す。

ii) 分析の結果

分析の結果はつぎの表(表I-10)のごとくになった。これによるならば、「日本」「日本以外の国々」「世界全般」「その他」の割合は2冊の教科書

邦共和国のばあいも、ドイツ民主共和国のばあいも、「日本との関係」について記述は1回もでてこない。また西ドイツでは「国内のことがら」の記述が3回でてくるが、東ドイツではそれが1回もでてこない(表I-6a, b, c)。

⑤ カナダには他の国でみられない傾向がある。それは「自然」が全体の過半数をしめている

表Ⅰ—10 中学校の社会科教科書の内容の概略

記述の対象	『日本と世界の国々』 (中教出版)	『中学社会』 (日本書籍)
日本	48%	43%
日本以外の国々	42	40
世界全般	4	11
その他	6	6
計	100	100

表Ⅰ—11 地域ごとのとり扱い量

	『日本と世界の国々』 (中教出版)	『中学社会』 (日本書籍)
アジア	27%	28%
ヨーロッパ	20	22
アングロアメリカ	15	13
アフリカ	10	11
ラテンアメリカ	9	9
ソ連	9	8
オセアニア	7	5
北極・南極	3	4
計	100	100

においてだいたい同じ傾向にあり、「日本」に関する記述の割合がもっとも高く、つぎが「日本以外の国々」であるが、両者の差はわずかに数%で、この2つの分類項目で全体の8割強をしめていることがわかる。

つぎに日本以外の国々の部分を地域名によって分類したのがつぎの表(表Ⅰ—11)である。この表から世界の諸地域に割かれているページ数の比率は2冊の教科書においてほとんど同じであり、アジア、ヨーロッパ、アメリカが上位に位置していることがわかる。

(2) 外国名、都市名の頻度分析

i) 分析の方法

① 国名、都市名が載っている回数をそれぞれ数える。

② 大陸、海洋は数えない。

③ 「～人」「～軍」などは国名と別に集計したがここでは省略する。

ii) 分析の結果

① 中教出版の『日本と世界の国々』および日本書籍の『中学社会』における外国名の頻度はつぎの表(表Ⅰ—12a, b)のとおりである。どちらの教科書においてもアメリカ合衆国の頻度がもっとも高く、2位のイギリスあるいはドイツの約2倍にもなっている。また上位10か国をとりあげ

表Ⅰ—12 a 中教出版『日本と世界の国々』における外国名の出現頻度

順位	国名	回数	順位	国名	回数
1	アメリカ	52	12	ニュージーランド	6
2	イギリス	25	13	メキシコ	5
3	ソ連	25	14	ハンガリー	4
4	中国	23	14	イタリア	4
5	インド	15	15	ベルギー	3
6	オーストラリア	14	15	スイス	3
7	フランス	12	15	ポルトガル	3
8	カナダ	10	15	タイ	3
9	西ドイツ	9	15	フィリピン	3
9	北朝鮮	9	15	ペルー	3
10	韓国	8	15	チリ	3
11	オランダ	7		以下略	
12	東ドイツ	6			
12	ドイツ	6	計	80か国	336

表Ⅰ—12 b 日本書籍『中学社会』における外国名の出現頻度

順位	国名	回数	順位	国名	回数
1	アメリカ	73	13	スイス	5
2	ドイツ	37	13	スペイン	5
3	イギリス	34	14	インドネシア	4
4	ソ連	32	14	ユーゴスラビア	4
5	中国	19	14	ペルー	4
6	フランス	17	14	チェコスロバキア	4
7	オーストラリア	16	15	ルクセンブルク	3
8	インド	14	15	ルーマニア	3
9	朝鮮	13	15	フィリピン	3
9	カナダ	13	15	チリ	3
10	ブラジル	12	15	アルゼンチン	3
11	メキシコ	7	15	タイ	3
11	ベルギー	7	15	トルコ	3
12	イタリア	6		以下略	
13	ポルトガル	5	計	71か国	411

て2冊の教科書を比較してみれば、国によっていくぶん順位の相異がみられるものの、アメリカ、イギリス、ドイツ、ソ連、中国、インド、オーストラリア、フランス、カナダ、朝鮮といった10位までに入った国々が両者で一致していることは注目される。

② 上記の2冊の教科書における外国の都市名の出現頻度を国別に分類してみると、つぎの表(表Ⅰ—13a, b)のごとくになった。『日本と世界の国々』には7か国の116都市についての記述があり、『中学社会』には23か国の101都市につ

表 I-13 a 中教出版『日本と世界の国々』における都市名の出現頻度

1	中 国	21	7	北 朝 鮮	2
2	ア メ リ カ	13	7	ア ラ ブ 連 合	2
3	西 ド イ ツ	7	7	オーストラリア	2
3	イ タ リ ア	7	8	シンガポール	1
4	イ ギ リ ス	6	8	ベ ト ナ ム	1
4	ソ 連	6	8	ホ ン コ ン	1
5	東 ド イ ツ	4	8	パキスタン	1
5	カ ナ ダ	4	8	セ イ ロ ン	1
6	中華民国(台湾)	3	8	チェコスロバキア	1
6	イ ン ド	3	8	ア ブ ダ ビ	1
6	フ ラ ン ス	3	8	ギ ル シ ア	1
6	南 朝 鮮	3	8	オーストリア	1
6	南アフリカ共和国	3	8	イスラエル	1
7	ス イ ス	2	8	ベルギー	1
7	ブ ラ ジ ル	2	8	ト ル コ	1
7	オ ラ ン ダ	2	8	ビ ル マ	1
7	タ イ	2	8	アルゼンチン	1
7	インドネシア	2	8	タ イ	1
7	フィリピン	2			

表 I-13 b 日本書籍『中学社会』における都市名の出現頻度

1	ア メ リ カ	20	8	オ ラ ン ダ	1
2	中 国	19	8	ベルギー	1
3	ソ 連	11	8	ギ ル シ ア	1
4	フ ラ ン ス	6	8	オーストリア	1
4	イ タ リ ア	6	8	デンマーク	1
5	イ ギ リ ス	5	8	スウェーデン	1
5	イ ン ド	5	8	チェコスロバキア	1
6	オーストラリア	4	8	ポーランド	1
6	西 ド イ ツ	4	8	パキスタン	1
6	東 ド イ ツ	4	8	南ア共和国	1
7	北 朝 鮮	2	8	ス イ ス	1
7	カ ナ ダ	2	8	シンガポール	1
7	ブ ラ ジ ル	2	8	中華民国(台湾)	1
8	南 朝 鮮	1	8	ス ペ イ ン	1
8	バンラデシュ	1	8	ホ ン コ ン	1

いての記載がある。国名のばあいは1位のアメリカ合衆国が2位をひき離して圧倒的に高い頻度を示していたが、都市名のばあいには中国の頻度が高くなり、アメリカと並ぶかあるいはこれを越えるまでとなっており、ここではこの2か国とその他の国々との差が大きくなっている。しかし上位10か国をとりあげてみると2冊の教科書にとくに大きな相異はみられない。国名との比較でいえば、国名のばあいに順位の低かったイタリアがい

ずれの教科書においてもかなり上位に位置していることが注目される。

2. 小学生の作文の内容分析

この分析は小学生の対外意識をとらえることを目的としたパイロット・スタディである。そこで小学校の授業時間中に「外国に関してどういうことでもいいですから想いつくままに書いて下さい」という指示をあたえて、自由に作文を書いてもらい、その作文の内容分析をおこなった。

調査対象となった学校名、学年、人数、男女数、実施日はつぎに示すとおりである(表 I-14)。

表 I-14 調査対象

学年	学 校 名	人数	男	女	実 施 日
2	吹田市立桃山台小	35	18	17	昭和51年5月28日
3	桜井市立大福小	30	15	15	6月1日
4	〃	26	13	13	6月1日
4	奈良市立二名小	25	13	12	6月2日
4	吹田市立桃山台小	38	18	20	6月3日
5	〃	38	19	19	5月28日
6	〃	40	19	21	6月1日

a) 分析 I —— 関心の方向の頻度分析 ——

ここでは小学生の外国に対する関心の方向(どのような対象に関心が向けられているか)をとらえるために、まず作文の中のでてくる外国名、都市名、地名、河川名、山脈名などすべてをぬき出した。つぎにそれらがどこの国にあるかによって、国ごとに記述の回数を調べた。たとえばパリといえばフランス、ミシシッピー川といえばアメリカ合衆国というように分類した。これは作文のすべてに目をとらしてみた結果、国名が書かれていることが多く、都市名、地名、河川名、山脈名などだけを書いているという例が少なく、このことから小学生の外国に対する関心の方向は国名によってもっとも適切に分類されると考えたからである。ただし特定の外国名をあげず外国一般について書いたものは、対象を外国一般とし、またハワイにてはアメリカ合衆国にひとまとめにしないで、そのまま別の項目として分類した。それだけで他国に匹敵する言及回数となったからであり、合衆国本土との比較も可能となるからである。

さて、分析の結果はつぎのようになった(表 I-15)。この表では2年生から6年生をつうじて

表 I-15 小学生の作文における外国名の出現頻度

国名	アメリカ		フランス		外国		スイス		アフリカ		ハワイ		イギリス		オーストラリア		中国		ソ連		インド	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
2	8	3	6	8	3	0	0	2	2	1	6	5	3	2	1	2	4	0	0	2	5	1
3	4	2	1	1	2	3	1	2	7	2	1	3	1	1	0	0	1	0	1	0	2	0
4	23	8	4	16	6	7	0	20	10	3	0	3	4	5	4	7	3	3	6	0	3	0
5	6	2	1	12	2	8	1	1	1	0	1	0	0	1	2	1	0	1	2	3	1	0
6	13	9	0	9	13	11	1	8	1	1	3	3	2	4	1	4	2	2	1	1	0	0
計	54	24	12	46	26	29	3	33	21	7	11	14	10	13	8	12	10	6	10	6	11	1
	78		58		55		36		28		25		23		20		16		16		12	

表 I-16 男女別の外国名の出現順位

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
男	アメリカ	外国	アフリカ	フランス	インド	ハワイ	中国	ソ連	イギリス	オーストラリア	スイス
女	フランス	スイス	外国	アメリカ	ハワイ	イギリス	オーストラリア	アフリカ	中国	ソ連	インド

10回以上の言及がなされた対象だけをとりあげてみた。全体からみた関心の方向の順位はアメリカ合衆国、フランス、外国一般、スイス、アフリカ、ハワイ、イギリス、オーストラリア、中国、ソ連、インドとなっており、他とくらべてアメリカ合衆国の言及数が圧倒的に多いことがわかる。

つぎにこの順位を男女別にみるとつぎの表(表 I-16)のごとくなる。男子ではアメリカが1位、女子ではフランスが1位で、それぞれ2位の外国一般とスイスを大幅にひき離している。関心の方向の順位に関して男子と女子の相異のもうひとつの重要な点は、男子ではアフリカ、インドといった途上国がかなり上位に入っているのに対して、女子のばあいには上位に位置しているのはす

べて西欧諸国であるということである。また、スイスに関しては女子では2位にあげられているのに対して、男子では11位にやっとでてきているのは注目される。

b) 分析 II —— 反応の型の分析 ——

ここでは小学生が作文の中で外国について言及するばあい、国そのものに焦点を合わせるのか、それとももっと個別なことから(たとえば河川、山脈、人物など)に焦点を合わせるのかをということをとらえようとした。そのために作文の中にてでくるすべての対象のうち名称のみを書いているばあいを除外し、対象に対して何らかの記述がなされているものについて分析をおこなった。

分析の基準はつぎのとおりである。

表 I-17 作文における反応の型の分析

反応型	混合反応		全体反応		地域別反応		国別反応		都市別反応		特定対象別反応		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
2	6	4	1	0	0	0	8	12	2	0	1	1	35
3	2	1	2	1	4	2	4	6	0	0	3	5	30
4 a	2	5	1	0	1	1	11	12	1	0	2	2	38
4 b	4	4	2	2	0	0	7	4	0	1	1	1	26
4 c	0	0	1	2	1	0	7	10	2	2	0	0	25
5	1	5	2	3	4	0	9	9	0	2	0	0	35
6	2	4	2	1	0	0	12	14	0	2	2	1	40
計	17	23	11	9	10	3	58	67	5	7	9	10	229
	40		20		13		125		12		19		

- ①全体反応…「外国とは」という形で書いているもの
- ②地域別反応…アフリカ, ヨーロッパ, アジアなどの地域名で書いているもの
- ③国別反応…個々の国名をあげて書いているもの(ただしハワイのばあいはここに含めた)
- ④都市別反応…個々の都市名をあげて書いているもの
- ⑤特定対象別反応…地名, 河川名, 山脈名, 人物名などをあげて書いているもの
- ⑥混合反応…上記の反応の2つ以上にまたがっているもの(対象が複数で上記の基準で分類ができないばあいはここに含めた)

以上の手続きによって小学生の作文の内容分析をおこなった結果はつぎの表(表I-17)のようになった。これによるならば反応の型は国別反応, 混合反応, 全体反応, 特定対象別反応, 地域別反応, 都市別反応という順位であることがしられる。また, 国別反応の数が圧倒的に多く, 全体の半数までをしめており, つぎの混合反応の3倍にもなっていることは注目される。

c) 分析III——直接反応と間接反応——

ここでは小学生が外国についての自由な作文の中で外国に直接関係のあることがらを書いているか, それとも直接には関係のうすいことがら——たとえば友達の話, 自分の夢など——を書いているかについて分析した。分析の単位は文とし, 作文に書かれている文をひとつずつ「直接反応」か「間接反応」かに分類していくという方法をとった。分析の結果はつぎの表(表I-18)のとおり。

表I-18 作文における直接反応と間接反応

学年	反応	直接反応	間接反応	計
2		14%	86%	100%
3		36	64	100
4		43	57	100
5		51	49	100
6		78	26	100

であり, 高学年になるにつれて「直接反応」の割合が増加することがはっきりと示されている。

d) 分析IV——志向の様式の分析——

つぎに直接反応の文にかぎって, それらを「志

向の一般理論」の枠組を用いて「認知的志向」「感情的志向」「評価的志向」「行動的志向」のいずれかに分類してみた。

分析の基準はつぎのとおりである。

- ①認知的志向…「カナダには広い土地がある」など事実について書いているもの
- ②感情的志向…「フランスが好きだ」など好悪の感情について書いているもの
- ③評価的志向…「アメリカの政治は立派だ」など評価について書いているもの
- ④行動的志向…「中国へ行ってみよう」など行動につながる側面について書いているもの

分析の結果はつぎの表(表I-19)に示すとおり。

表I-19 作文の「志向の一般理論」の枠組による分析

国名	性別		志向			
	男	女	認知	感情	評価	行動
アメリカ	67	21	10	14	51	25
フランス	6	55	0	0	13	74
スイス	4	46	1	0	4	63
アフリカ	24	6	0	5	46	3
ハワイ	20	9	0	3	11	18
イギリス	7	8	0	1	5	12
オーストラリア	5	16	3	1	9	13
中国	4	8	2	0	6	2
ソ連	13	13	3	1	8	8
インド	19	1	0	2	7	1
外国一般	62	83	7	17	26	59
計	231	266	26	44	186	278

りである。全体に「認知的志向」と「行動的志向」に関する文が多く, これらとくらべて「感情的志向」と「評価的志向」に関する文はきわめて少ない。また, 男子と女子を比較したばあい, 女子の方で「行動的志向」が多いことは注目される。

e) 分析V——価値付与と価値剝奪——

ここでは小学生の作文の個々の文を, それがその文の対象(特定の国や外国一般)にとって, H・ラスウェルの用語でいえば, 「価値付与(好意的)」か「価値剝奪(非好意的)」か, それとも「中立(どちらでもない)」かの3つの型に分けてみた。分析の結果を示したつぎの表(表I-20)から, 全体的にみて「価値付与」の割合が高く

は「人種」(男子)と「自然」(男子)などがとくに多くとりあげられている対象である。

Ⅰ 意識調査

(1) 調査目的

この調査は外国に関することがおよび外国とのかかわりに関することからについて、人々がどのような「見方」「考え方」「感じ方」をしているかをとらえるためのパイロット・スタディとしておこなったものである。調査の目的は「仮説の検証」というよりも「問題の発見」にあったので、調査項目は広く網羅的なものとした。

(2) 調査方法

調査対象としては関西学院大学社会学部の11の演習に所属している学生248名(1年と3年)と慶応義塾大学法学部の2つの講義に出席している学生225名(2年, 3年, 4年)を選んだ。

つぎに調査方法は、講義の時間を約30分ほど割いてもらい調査員がくぼった調査票(質問紙)に被調査者が回答を記入する「自記式」の「集合調査法」を採った。なお、調査期間は1976年6月下旬の約1週間であった。

回収した調査票のうちフェース・シートの項目などに記入もれのあったものを除いたので、有効回収率は98.1%となった。

(3) 調査対象

有効回答者は464名であったが、その男女比は男性が69.8%、女性が30.2%、出生地別では六大都市が43.1%、その他の市が46.3%、町村が9.9%、義務教育を受けた場所については六大都市が41.0%、その他の市が45.5%、町村が9.0%となっている。また父兄の職業では農林漁業が3.2%、専門・自由職が13.2%、管理職が38.2%、事務職が14.4%、労務職が7.5%、商工自営が11.0%、主婦・無職が2.6%の割合となっている。なお、この調査では被調査者に主観的に家庭の生活程度を評価させたが、上が3.5%、中の上が34.3%、中の中が52.8%、中の下が6.5%、下が1.3%という結果になった。

(4) 調査結果

i) 外国一般に対する態度

① 「あなたは外国というと何か疎遠な感じが

しますか、それとも身近かな感じがしますか」という質問をおこなったが、「非常に疎遠な感じがする」が10.3%、「どちらかというと疎遠な感じがする」が37.3%、「どちらともいえない」が33.0%、「どちらかというと身近かな感じがする」が16.2%、「身近かな感じがする」が2.8%で、回答は外国は疎遠な感じがするという方にかなり傾いている。

② 「あなたは外国人が何から何まで日本人と違っていると思いますか、それとも人間は結局どこでも同じようなものであると思いますか」という質問に対しては、「何から何までちがっている」が3.2%、「どちらかというと違っている」が27.2%、「どちらともいえない」が25.0%、「どちらかというと同じようなものである」が37.5%、「まったく同じようなものである」が6.9%で、回答は人間はどこでも同じようなものであるという方にいくぶんか傾いている。

③ 「あなたは日本人と外国人が心のそこまでわかりあって気持ちを通じあうことはむづかしいと思いますか、それともむづかしくないと思いますか」という質問では、「非常にむづかしい」が11.6%、「どちらかというともむづかしい」が32.1%、「どちらともいえない」が23.5%、「どちらかというともむづかしくない」が21.1%、「全然むづかしくない」が11.6%という結果で、回答は心のそこまでわかりあって気持ちを通じあうことがむづかしいという方にいくぶんか傾いている。

④ 「あなたは外国の国々には何といてもやはり上下の序列があって、ある国の国際的な評価はその序列のどこに位置しているかによって決まるとは思いますか、それともそれぞれの国にはそれぞれすぐれた点があるので、上下の評価をすることはできないと思いますか」とはう質問をおこなった。その結果は「はっきりと上下の評価ができる」が15.1%、「どちらかというとも上下の評価ができる」が35.1%、「どちらともいえない」が25.4%、「どちらかというとも上下の評価はできない」が10.3%、「けっして上下の評価はできない」が13.4%となり、回答は上下の評価ができるという方にかなり傾いた。

⑤ 「あなたは現代では自分の国や社会に対する帰属意識の方が大切だと思いますか、それとも

世界の市民であるという意識あるいは全人類に対する帰属意識の方が大切だと思いますか」という質問についてはつぎのような結果をえた。「自分の国や社会に対する帰属意識の方が大切である」が13.2%、「どちらかという自分の国や社会に対する帰属意識の方が大切である」が25.9%、「どちらともいえない」が20.0%、「どちらかという全人類に対する帰属意識の方が大切である」が21.6%、「全人類に対する帰属意識の方が大切である」が18.5%で、自分の国や社会に対する帰属意識と世界や全人類に対する帰属意識がだいたいにおいてつり合っている。

⑥ 「あなたは外国にくらべて日本のおくれが気になる方ですか、それとも外国にくらべて日本がすすんでいるように感じる方ですか」という質問に対しては、「日本は非常におくれている」が4.5%、「どちらかという日本はおくれている」が3.2%、「どちらともいえない」が47.6%、「どちらかという日本はすすんでいる」が27.2%、「日本はすすんでいる」6.7%で、回答はどちらともいえないという中立的な部分に集中しながらも、日本がすすんでいるという方にいくらか傾いている。

⑦ 「あなたはどこか特定の外国にあこがれる方ですか、それとも特定の国を越える何か普遍的な価値（たとえば「宗教」や「人権」など）を重視する方ですか」という質問では、「特定の外国にあこがれる」が21.1%、「どちらかといえば特定の外国にあこがれる」が26.9%、「どちらともいえない」が21.3%、「どちらかという普遍的な価値を重視する」が16.6%、「普遍的な価値を重視する」が12.5%という結果になり、回答は特定の外国にあこがれるという方にかなり傾いている。

⑧ 「あなたは現在日本人が外国の出来事を評価するとき道徳論（事実をふまえないで何々をすべきだという考え方）になりすぎていると思いますか、それとも現実論（事実をふまえた功利的な考え方）になりすぎていると思いますか」という質問をしたが、結果は「道徳論になりすぎている」が15.3%、「どちらかという道徳論になりすぎている」が22.2%、「どちらともいえない」が32.5%、「どちらかという現実論になりすぎ

ている」が22.2%、「現実論になりすぎている」が6.0%となっており、回答は中立的な選択肢に集中しながらも、道徳論になりすぎているという考えの方にわずかに傾いている。

⑨ 「あなたは現在日本はもっと外国文化の受容に努力すべきだと思いますか、それとも日本独自の文化を守り育てることに心をつくすべきだと思いますか」という質問に対しては、「外国文化の受容に努力すべきだ」が7.3%、「どちらかという外国文化の受容に努力すべきだ」が5.8%、「どちらともいえない」が29.7%、「どちらかという日本独自の文化を守り育てるべきだ」が30.2%、「日本独自の文化を守り育てるべきだ」が25.9%という結果になっており、回答は圧倒的に日本独自の文化を守り育てるべきだという考え方に傾いている。

⑩ 「あなたは日本が外国と交流する場合、その交流は何かの目的のための手段として意味があると思いますか、それとも交流にはそれ自体で意味があると思いますか」という質問をしたが、「何かの目的のための手段として意味がある」が16.8%、「どちらかという何かの目的のための手段として意味がある」が12.9%、「どちらともいえない」が10.6%、「どちらかという交流にはそれ自体で意味がある」が21.6%、「交流にはそれ自体で意味がある」が37.3%となっており、回答は交流にはそれ自体で意味があるという方に圧倒的に傾いている。

ii) 具体的な特定の外国に対する態度

ここでは9つの側面から被調査者に具体的な特定の外国名をあげてもらおうという方法をとった。実際の質問文は、①「あなたは感じとしてはどの国が一番好きですか」（感情的側面＝ポジティブ）、②「あなたは感じとしてはどの国が一番嫌いですか」（感情的側面＝ネガティブ）、③「あなたは現在どの国が一番政治の実績をあげて国民に満足をあたえていると思いますか」（認知的側面＝ポジティブ）、④「あなたは現在どの国が一番多くの問題をかかえて混迷していると思いますか」（認知的側面＝ネガティブ）、⑤「あなたは現在日本がどの国と一番友好すべきだと思いますか」（評価的側面）、⑥「あなたが現在一番行きたいと思う国はどこですか」（行動的側面）、⑦

表Ⅰ-1 特定の外国に対する態度

(単位は実数)

好きな国	嫌いな国	実績をあげている国	混乱している国	友好すべき国	行きたい国	関心の有る国	身近かな国	知識を持っている国
アメリカ	94ソ連	93中国	61アメリカ	151中国	118アメリカ	124アメリカ	163アメリカ	256アメリカ
カナダ	51アメリカ	57スウェーデン	52インド	28アメリカ	110カナダ	43中国	47中国	19イギリス
スイス	43中国	50アメリカ	48イタリア	21オーストラリア	27フランス	35カナダ	17韓国	16フランス
イギリス	36韓国	39イギリス	21韓国	20ソ連	24スイス	31オーストラリア	15イギリス	12中国
オーストラリア	31南アフリカ	29西ドイツ	10中国	14北朝鮮	4イギリス	31ソ連	14オーストラリア	11韓国
フランス	31北朝鮮	28ソ連	10イギリス	12韓国	4オーストラリア	29イタリア	13フランス	8カナダ
ドイツ	15イスラエル	7スイス	8ソ連	7スイス	3西ドイツ	21韓国	13カナダ	5スペイン
スウェーデン	15イギリス	7オーストラリア	6ベトナム	4ブラジル	2ギリシャ	12フランス	12北朝鮮	4 :
オーストリア	15フランス	6フランス	5バングラデシュ	3アラブ連合	2中国	9スウェーデン	5西ドイツ	3 :
中国	8ドイツ	6 :	6 :	台湾	2オーストリア	9 :	スイス	3 :
:	インド	6 :	6 :	:	:	:	イタリア	3 :
:	:	:	:	:	:	:	:	:
なし	11なし	60なし	21なし	5なし	7なし	12なし	20なし	27なし

「あなたが現在一番関心をもっている国はどこですか」(動機的側面), ⑧「あなたが現在一番身近かに感じている国はどこですか」(動機的側面), ⑨「あなたが現在一番よく知識や情報を持っている国はどこですか」(動機的側面), というものである。調査結果については、上位の約10か国と「なし」と答えた者の数をつぎのような表(表Ⅰ-1)にまとめた。この結果からいくつかのことが指摘されよう。

① 9つの質問項目について回答の分散と集中の度合を検討してみるならば、集中度の高い方から「知識のある国」→「身近かな国」→「関心のある国」→「混乱している国」→「行きたい国」→「友好すべき国」→「好きな国」→「嫌いな国」→「実績をあげている国」という順位になる。もっとも集中度の高い「知識のある国」のばあい1位のアメリカと答えた者は被調査者全体(464名)の63%までを占め、2位のイギリスの3%とは圧倒的な差をつけている。ところがもっとも集中度の低い「実績をあげている国」については、1位の中国(13%)と2位のスウェーデン(11%)とはわずかに2%の差でしかない。

② 各質問項目ごとに被調査者の10%ほどがあげている国をひろってみると、「好きな国」では

アメリカ(20%)とカナダ(11%)とスイス(9%)の3か国、「嫌いな国」ではソ連(20%)とアメリカ(12%)と中国(11%)の3か国、「実績をあげている国」では中国(13%)とスウェーデン(11%)とアメリカ(10%)の3か国、「混乱している国」ではアメリカ(33%)1か国、「友好すべき国」では中国(25%)とアメリカ(24%)の2か国、「行きたい国」ではアメリカ(27%)とカナダ(9%)の2か国、「関心のある国」ではアメリカ(35%)と中国(10%)の2か国、「身近かな国」ではアメリカ(55%)1か国、「知識のある国」ではアメリカ(63%)1か国という結果になる。

③ 上記の被調査者の10%ほどがあげている国については、どの質問項目をとってもアメリカが上位に位置している。ここでは特定の外国について「感情」「認知」「評価」「行動」「動機」の諸側面から質問をこころみているが、これらのなかでもとくに動機=関与(態度対象としての特定の外国に自己を関与させる程度)的側面についての質問項目においてアメリカの上位集中度が高い。

④ また「感情(態度)的側面」と「認知(信念)的側面」については「ポジティブ」と「ネガティブ」の両面から質問をこころみたが、アメリカ

方はこのどちらの面においても上位にあげられている。たとえば「好きな国」では1位、「嫌いな国」では2位、「実績をあげている国」では3位「混迷している国」では1位にそれぞれあげられている。このことからアメリカに対しては人びとの態度に分極化がみられるといえよう。

⑤ 「なし」と答えた者は「嫌いな国」についての質問において最も多く(60名)、無回答(36名)と合わせると被調査全体の21%までを占めることになる。これは「好きな国」についての質問のばあい(32名、7%)とくらべて3倍もの数値である。「好きな国」に関する質問にくらべて「嫌いな国」に関する質問において「ない」と答える者の割合が高い傾向は時事通信社による「時事世論」調査においてもすでに確認されているものである。

iii) 外国との接触度

外国との接触度については2つの側面から質問をおこなった。ひとつは外国へ行くという経験であり、もうひとつは外国人の知り合いを持つという経験である。

① まず「あなたは外国へ行ったことがありますか、あるいは行く計画がありますか」という質問をしてみたが、「ある」が26.1%、「ない」が72.2%という結果がえられた。つづいて「ない」と答えた人に対して「あなたは外国へ行ってみたいと思いますか」とたずねた。その結果は「まったくそう思う」が62.4%、「まあそう思う」が23.9%、「あまりそう思わない」が9.3%、「まったくそう思わない」が3.6%となっており、回答は肯定的方向に大きく傾いている。

② つぎに「あなたは誰か外国人の知り合いがありますか、あるいはありましたか」という質問をしたが、結果は「ある(あった)」が36.6%、「ない(なかった)」が60.6%となった。「ない」と答えた者に対してひきつづき「あなたは外国人の知り合いを持ちたいと思いますか」という質問をおこなったが、結果は「まったくそう思う」が33.8%、「まあそう思う」が39.8%、「あまりそう思わない」が20.8%、「まったくそう思わない」が5.6%となっており、肯定的な回答が否定的な回答をはるかに越えているものの、前の質問とくらべるならば、否定的な回答の割合もけっして小

さなものとはいえ、外国人と知り合いになるということに対しては人びとの間にかかなりの躊躇がみられるといえよう。

iv) 社会・政治的態度

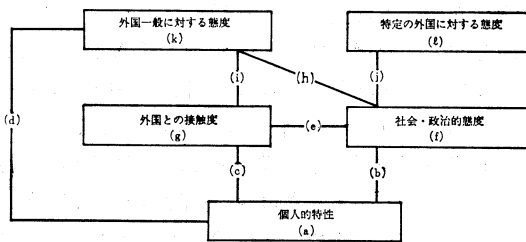
① まず「あなたは日本人であることに満足していますか」という質問をして、「非常に満足」32.1%、「まあ満足」52.8%、「やや不満」7.5%、「非常に不満」2.4%という結果をえた。回答は全体に満足の方に大きく傾いている。

② つぎに「あなたは現在の日本の政治や社会に満足していますか」とたずねた。その結果は「非常に満足」が1.1%、「まあ満足」が16.0%、「やや不満」が46.1%、「非常に不満」が31.9%となっており、回答は不満の方に大きく傾いている。

③ 最後に「あなたの政治的態度の傾向はつぎのうちどれが一番近いですか」という質問をおこなったが、「自民党的」20.9%、「民社党的」9.3%、「公明党的」0.4%、「社会党的」7.1%、「共産党的」3.9%、「とくになし」48.3%、「その他」6.0%となった。

V) 質問諸項目間の関係

以上に述べてきた各質問項目の相互の関係については、具体的な特定の外国に関する質問項目を除いて、相関マトリックス(Pearsonの相関係数)によって検討した。具体的な特定の外国に関する質問項目については、相関係数の計算が意味をなさないので、クロス表を用いて分析した。ここではいくつかの顕著な知見だけをごく簡単に紹介しておきたい。



a) 個人的特性に関する質問項目間の関係

① 出生地と義務教育を受けた場所との相関はきわめて高い(0.74)。

② 町村の出身者および町村で義務教育を受けた者にくらべて都市の出身者および都市で義務教育を受けた者の方で生活程度が高いという傾向が

わずかにみられる (0.11と0.14)。

⑧ 男性にくらべて女性の方で都市で義務教育を受けた者が多く、生活程度も高いという傾向がわずかにみられる (-0.12と-0.11)。

b) 個人的特性と社会・政治的態度との関係

どの質問項目ごとの相関もきわめて小さく、とくに指摘すべき点もみいだせない。

c) 個人的特性と外国との接触度との関係

① 外国へ行った経験があるか、あるいは行く計画があるかという質問項目とデモグラフィック要因との相関はいずれもきわめて小さい。

② ところが外国へ行った経験がなく、行く計画のない者のなかでは生活程度の高い者で、外国へ行きたいという気持が強いという傾向がわずかにみられる (0.11)。

③ 外国人の知人があるかどうか、という質問および外国人の知人のない者でそのような知人がほしいかどうか、という質問では、男性よりも女性、町村の出身者よりも都市の出身者、町村で義務教育を受けた者よりも都市で義務教育を受けた者の方で肯定的回答の割合が高いという傾向がわずかにみられる (-0.11と0.12と0.13)。

d) 個人的特性と外国一般に対する態度との関係

外国一般に対する態度と個人的特性との相関は全体にきわめて小さい。わずかにつぎのような点があげられる。

① 生活程度の高い者は日本がすすんでいると答え、生活程度の低い者は日本がおくれていると答える傾向がわずかにみられる (-0.12)。

② 男性は特定の国を越える何か普遍的な価値を重視し、女性はどこか特定の外国にあこがれるという傾向がわずかにみられる (-0.11)。

③ 男性は外国文化の受容に努力すべきだと考え、女性は日本独自の文化を守り育てるべきだと考える傾向がわずかにみられる (0.15)。

e) 社会・政治的態度と外国との接触度との関係

① 外国へ行ったことがあるか、あるいは行く計画がある者はそうでない者にくらべて自分が日本人であることの満足感および現在の日本の政治や社会に対する満足感が高いという傾向がわずかにみられる (0.11と0.14)。

② 外国人との知り合いがあったか、あるいは現在あると答える者はそうでない者にくらべて、自分が日本人であることの満足感、および現在の日本の政治や社会に対する満足感が高いという傾向がわずかにみられる (0.11と0.16)。

f) 社会・政治的態度に関する質問項目間の関係

日本人であることの満足感と現在の日本の社会や政治への満足感との相関はいくぶん高い (0.29)。その他の項目間の相関はいずれもきわめて小さい。

g) 外国との接触度に関する質問項目間の関係

① 外国へ行ったことがある、あるいは行く計画があるという回答と外国人の知り合いがいた、あるいはいるという回答との相関はかなり高い (0.38)。

② 外国へ行ったことのない者のなかでの行きたいという希望と、外国人の知り合いのない者のなかでの持ちたいという希望との相関はかなり高い (0.42)。

③ 外国人の知り合いがいるかどうかということ、外国へ行きたいかどうかということの相関はかなり高い (0.31)。

④ 外国へ行ったことがあるかどうかということ、外国人の知り合いがほしいかどうかをいうことの相関はかなり高い (0.31)。

h) 社会・政治的態度と外国一般に対する態度との関係

全体として社会・政治的態度と外国一般に対する態度との相関はいずれもごく小さい。わずかにつぎのような傾向をよみとることができる。

① 日本人であることに満足している者、および日本の政治や社会に満足している者は日本がすすんでいると考え、日本人であることに不満な者、および日本の政治や社会に不満な者は、日本がおくれていると考える傾向がわずかにみられる (-0.15と-0.12)。

② 日本人であることに満足している者は、特定の国を越える何か普遍的な価値を重視し、日本人であることに不満な者は、どこか特定の国にあこがれる傾向がわずかにみられる (-0.14)。

③ 日本人であることに満足している者は、日本独自の文化を守り育てるべきだと考え、日本人

であることに不満な者は、外国文化の受容に努力すべきだと考える傾向がわずかにみられる(-0.14)。

i) 外国との接触度と外国一般に対する態度との関係

① 外国へ行ったことがある者、あるいは外国へ行く計画がある者は外国を身近かに感じ、外国へ行ったことがない者あるいは外国へ行く計画がない者は、外国を疎遠に感じる傾向がかなり強くみられる(-0.33)。

② 同じ傾向が外国へ行ったことはないが、行きたいと思っている者とそうでない者についてもみられる(-0.31)。

③ 外国人の知り合いがあった者、あるいはある者は外国を身近かに感じ、外国人の知り合いがなかった者あるいはない者は、外国を疎遠に感じる傾向がかなり強くみられる(-0.30)。

④ 同じ傾向が外国人の知り合いはないが、外国人の知り合いをもちたいと思っている者とそうでない者についてもみられる(-0.27)。

⑤ 外国へ行ったことはなく、行く計画もないが、外国へ行ってみたいと思う者は全人類に対する帰属意識の方が大切だと思ひ、外国へ行ってみたいと思わない者は、自分の国や社会に対する帰属意識の方が大切だと思ひ傾向がわずかにみられる(-0.12)。

⑥ 外国人の知人がいる者および外国人の知人がほしいと思ひ者は、全人類に対する帰属意識の方が大切だと思ひ、外国人の知人がいない者および外国人の知人がほしいと思ひない者は、自分の国や社会に対する帰属意識の方が大切だと思ひ傾向がわずかにみられる(-0.13と-0.16)。

⑦ 外国人の知り合いがある者(あった者)は、特定の国を越える何か普遍的な価値を重視し、外国人の知り合いのない者はどこか特定の外国にあこがれる傾向がわずかにみられる(-0.11)。

⑧ 外国へ行ったことがある者(行く計画がある者)および外国へ行ってみたいと思ひている者は、現在日本人が外国の出来事を評価するとき道徳論になりすぎていると考へ、外国へ行ったことがない者(行く計画がない者)および外国へ行ってみたいと思ひていない者は、それが現実論になりすぎていると考へる傾向がわずかにみられる

(0.12と0.13)。

⑨ 外国人の知人をもっている者(いた者)は、現在日本は日本独自の文化を守り育てることに心をつくすべきだと思ひ、外国人の知人をもっていない者(いなかった者)は、現在日本は外国文化の受容に努力すべきだと思ひ傾向がわずかにみられる(-0.13)。

⑩ 外国へ行ったことがある者(行く計画のある者)および外国へ行ってみたいと思ひている者は、国際交流というものは交流それ自体に意味があると考へ、外国へ行ったことがない者(行く計画のない者)および外国へ行ってみたいと思ひていない者は、国際交流というものは何かの目的のための手段として意味があると考へる傾向がわずかにみられる(-0.12と-0.15)。

⑪ 同じ傾向が外国人の知り合いはないが、そのような知り合いを持ちたいと思ひている者とそうでない者についてもわずかにみられる(-0.14)。

j) 社会・政治的態度と特定の外国に対する態度との関係

特定の外国に対する態度についての質問文は「どの国が一番好きですか」「どの国が一番嫌いですか」などの形式で、各自に1か国ずつ国名をあげてもらおうという方法をとっている。このばあい各国に何らかの序列をア・プリオリに設定するということとはできないので、相関係数は意味をなさない。そこで社会・政治的態度と特定の外国に対する態度との関係は、クロス表によって検討した。なお現在の日本の政治や社会に満足しているかどうかという質問で「非常に満足」という回答はわずか5名で、これを「まあ満足」の73名、「やや不満」の213名、「非常に不満」の150名と同じようにとりあつかうことはできないので、この5名は分析の対象から除外している。同様に政治的態度(政党支持)の傾向をきいた質問で「公明党」という回答はわずか2名で、これを「自民党」(96名)、「民社党」(43名)、「社会党」(33名)、「共産党」(18名)、「とくになし」(223名)と同じように並べて比較することはできないので、これも分析の対象から除外している。

① 現在の日本の政治や社会に満足な者も不満な者も好きな国としてはアメリカを1位にあげて

いる。そして満足感の3つの段階（まあ満足、やや不満、非常に不満）のいずれにおいても上位5か国はアメリカ、カナダ、スイス、イギリス、フランスであり、それぞれの国をあげる割合も3つの段階のいずれにおいてもそれほど差異のない値になっている。

② 現在の日本の政治や社会に満足な者も不満な者も嫌いな国はソ連が1位で、上位5か国にはソ連のほかアメリカ、韓国、中国、南アフリカがあげられており、それぞれの国をあげる割合も満足感の3つの段階のいずれにおいてもそれほど差異のない値になっている。以上から現在の日本の政治や社会への満足度と好きな国、嫌いな国の選別にはとくに関係がみられないといえる。

③ 政治的態度と好きな国との関係については、どの政党（とくになしを含めて）をとっても好きな国としてアメリカが1位か2位に位置づけられる。つぎに好きな国として中国をあげる者の割合は「共産党」(11.1%)、「社会党」(6.1%)、「民社党」(2.3%)、「とくになし」(2.2%)、「自民党」(0.0%)という順位となる。この結果から政治的態度と好きな国は、アメリカに関しては何らの関係もみられないが、中国については革新政党支

持者ほど中国選好が強いという関係がみられる。

④ 政治的態度と嫌いな国との関係については、アメリカを嫌いな国としてあげる割合は「共産党」(22.1%)、「社会党」(15.2%)、「とくになし」(16.1%)、「民社党」(6.9)、「自民党」(4.2%)という順位であり、他方において中国を嫌いな国としてあげる割合は「民社党」(23.4%)、「自民党」(15.7%)、「共産党」(11.1%)、「とくになし」(9.0%)、「社会党」(0.0%)という順位になっている。アメリカは革新政党支持者層によって嫌われ、中国は保守政党支持者層によって嫌われているという傾向がみられる。

k) 外国一般に対する態度に関する質問項目間の関係

外国一般に対する態度に関する質問項目間の関係を検討するためにつぎのような相関マトリックス(表Ⅰ-2)を作成したが、そのさい内容の関連性から考えて項目6, 8, 9については選択肢の順序を逆にした。この結果からするならば、諸項目間の関係についてはわずかな相関がみられるものとある程度の相関のみみられるものがある。つぎにそれらを列記しておきたい。

(1) ある程度の相関がみられる諸項目

表Ⅰ-2 外国一般に対する態度の相関マトリックス (Pearson の相関係数)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 外国は疎遠な感じがする 外国は身近かな感じがする		0.11	0.17	0.09	0.10	0.09	0.07	0.07	0.04	0.07
2. 外国人は日本人と違っている 人間はどこでも同じである	0.11		0.23	0.04	0.10	0.02	0.04	-0.09	0.00	0.07
3. 心の底までわかるのはむづかしい 心の底までわかるのはむづかしくない	0.17	0.23		0.09	0.14	0.05	-0.00	-0.04	0.10	0.10
4. 外国の国々は上下の評価ができる 外国の国々は上下の評価ができない	0.09	0.04	0.09		0.20	0.18	0.10	0.00	-0.04	0.16
5. 自分の国や社会への帰属意識が大切だ 全人類への帰属意識が大切だ	0.10	0.10	0.14	0.20		0.07	0.14	0.00	0.01	0.19
6. 日本はすすんでいる 日本はおくれている	0.09	0.02	0.05	0.18	0.07		-0.03	0.14	0.23	0.11
7. 特定の外国にあこがれる 普遍的な価値を重視する	0.07	0.04	-0.00	0.10	0.14	-0.03		0.01	-0.08	0.07
8. 現実論になりすぎている 道徳論になりすぎている	0.07	-0.09	-0.04	0.00	0.00	0.14	0.01		0.05	0.04
9. 日本文化を守り育てるべきだ 外国文化の受容に努めるべきだ	0.04	0.00	0.10	-0.04	0.01	0.23	-0.08	0.05		0.02
10. 国際交流は手段として意味がある 国際交流はそれ自体で意味がある	0.07	0.07	0.10	0.16	0.19	0.11	0.07	0.04	-0.02	

① 「日本人と外国人が心の底までわかりあうのはむづかしい——むづかしくない」と「外国人は何から何までちがっている——同じようなものである」(0.23)

② 「自分の国や社会に対する帰属意識が大切である——全人類に対する帰属意識が大切である」と「外国の国々は上下の評価ができる——できない」(0.20)

③ 「日本独自の文化を守り育てるべきだ——外国文化の受容に努力すべきだ」と「日本はすすんでいる——おくられている」(0.23)

(2) わずかな相関がみられる諸項目

④ 「外国人は何から何まで違っている——同じようなものである」と「外国は疎遠な感じがする——身近かな感じがする」(0.11)

⑤ 「日本人と外国人が心の底までわかりあうのはむづかしい——むづかしくない」と「外国は疎遠な感じがする——身近かな感じがする」(0.17)

⑥ 「自分の国や社会に対する帰属意識が大切である——全人類に対する帰属意識が大切である」と「外国は疎遠な感じがする——身近かな感じがする」(0.10)

⑦ 「自分の国や社会に対する帰属意識が大切である——全人類に対する帰属意識が大切である」と「外国人は何から何まで違っている——同じようなものである」(0.10)

⑧ 「自分の国や社会に対する帰属意識が大切である——全人類に対する帰属意識が大切である」と「日本人と外国人が心の底までわかりあうのはむづかしい——むづかしくない」(0.14)

⑨ 「日本独自の文化を守り育てるべきだ——外国文化の受容に努力すべきだ」と「日本人と外国人が心の底までわかりあうのはむづかしい——むづかしくない」(0.10)

⑩ 「国際交流は何かの目的のための手段として意味がある——国際交流にはそれ自体で意味がある」と「日本人と外国人が心の底までわかりあうのはむづかしい——むづかしくない」(0.10)

⑪ 「日本はすすんでいる——おくられている」と「外国の国々は上下の評価ができる——できない」(0.18)

⑫ 「どこか特定の外国にあこがれる——特定の国を越える普遍的な価値を重視する」と「外国の国々は上下の評価ができる——できない」(0.10)

⑬ 「国際交流は何かの目的のための手段として意味がある——国際交流にはそれ自体で意味がある」と「外国の国々は上下の評価ができる——できない」(0.16)

⑭ 「どこか特定の外国にあこがれる——特定の国を越える普遍的な価値を重視する」と「自分の国や社会に対する帰属意識が大切である——全人類に対する帰属意識が大切である」(0.14)

⑮ 「国際交流は何かの目的のための手段として意味がある——国際交流にはそれ自体で意味がある」と「自分の国や社会に対する帰属意識が大切である——全人類に対する帰属意識が大切である」(0.14)

表Ⅰ-3 特定の外国に対する態度の一致率

単位は%

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 好きな国		4.8	4.9	10.5	19.8	51.8	34.6	30.4	31.5
2. 嫌いな国	4.8		0.1	17.2	5.5	0.1	9.6	9.1	9.7
3. 実績をあげている国	4.9	0.1		7.0	27.0	15.0	18.5	18.6	18.4
4. 混迷している国	10.5	17.2	7.0		14.4	14.6	22.9	31.9	37.3
5. 友好すべき国	19.8	5.5	27.0	14.4		21.5	31.6	34.9	33.0
6. 行きたい国	51.8	0.1	15.0	14.6	21.5		38.8	34.8	33.2
7. 関心のある国	34.6	9.6	18.5	22.9	31.6	38.8		46.3	50.6
8. 身近かな国	30.4	9.1	18.6	31.9	34.9	34.8	46.3		72.4
9. 知識を持っている国	31.5	9.7	18.4	37.3	33.0	33.2	50.6	72.4	

る」(0.19)

⑯ 「外国の出来事を評価するとき現実論になりすぎている——道徳論になりすぎている」と「日本はすすんでいる——おくられている」(0.14)

⑰ 「国際交流は何かの目的のための手段として意味がある——国際交流にはそれ自体で意味がある」と「日本はすすんでいる——日本はおくられている」(0.11)

1) 特定の外国に対する態度に関する質問項目の関係

特定の外国に対する態度に関する質問項目間の関係を検討するために、つぎのような質問相互間での一致の度合いを示す表(表Ⅱ-3)を作成した。この表中の数値はそれぞれ交差した2つずつの質問において何らかの国名をあげた者(なしという回答者、無記入、無効を除いて)のなかで何%が共通した国名をあげたかを示している。この結果からするならば、一致率はだいたいにおいて、①70%以上、②40-50%台、③25-30%台、④25%以下の4つのグループに区別できる。ここではとくに①②③のグループだけをあげておこう。

① 70%以上の一致率

「身近かな国」と「知識のある国」

② 40-50%台の一致率

「関心のある国」と「身近かな国」

「関心のある国」と「知識のある国」

「好きな国」と「行きたい国」

③ 25-30%台の一致率

「好きな国」と「関心のある国」

「友好すべき国」と「関心のある国」

「行きたい国」と「関心のある国」

「好きな国」と「身近かな国」

「混迷している国」と「身近かな国」

「友好すべき国」と「身近かな国」

「行きたい国」と「身近かな国」

「好きな国」と「知識のある国」

「混迷している国」と「知識のある国」

「友好すべき国」と「知識のある国」

「行きたい国」と「知識のある国」

おわりに

この小論においては、日本人の対外イメージをとらえるためのパイロット・スタディとしておこなった「小学校・中学校の社会科教科書の内容分析」「小学生の外国に関する自由作文の内容内析」「大学生の対外意識調査」の結果を報告してきた。しかしこれらの調査や分析がさまざまの問題をのこしていることはいうまでもなく、分析の対象についても、分析の方法についても、さらに多くの検討や創意が加えられなければならないことを指摘しておきたい。

(この小論は今井肇、萩原八須子、巽英子、
富和万紀子、上田はるひ、清水和枝、門野圭
子の諸君との共同研究によるものである。)